ースが多いようで，ネットワーク確立の必要性が痛感された．火球を恒常観測する重要性は多くの人が認めているものの，実現までにはあと一歩の努力が必要のようである．

物理観測に興味をもつ人も目立って増えて，流星スペクトル，色指数，光度変化といった問題にかなりの人が興味を寄せていた．FM 電波を利用して行なう流星の電波観測は日本で考案されたものであるが，これによって観測を志す人も多い．今回も木下正雄氏が昼間流星群検出の試みを発表しておられた．これはたいへん興味深いものであるが，あえて私見を述べさせてもらうなら，観測されたエコーと現実の流星との同定にもう少しの努力がほしいと思われる．一方，個人的な話合いで聞いたところでは，テレビカメラを使用して流星観測のテストをはじめている人もあり，感度の点でまだ問題が多いらしいが，流星観測の客観データを得る上で大きな意味をもつ試みであると思われた．

5. おわりに

日本における流星の観測，研究は，その大部分がアマチュアによって行なわれている．そのアマチュアの仕事も最近は相当に高いレベルのものになってきている．それは日本流星研究会を中心とする，根気のよい普及活動によるところが大きい．程度の高い研究も重要であるが，それを生み出すためには，初心者に対して親切な指導を欠かすことなく，十分な配慮をすることが必要である．今回の流星会議にも，「空に星があることを知っていれば参加資格がある．といわれたのでやってきた」という発言があった．筆者ははこの流星会議を，高度の知識をもつ一部の人たちの会議とすることのないよう，初心の人にまで大きく開いた集まりであるよう心から期待したい．その期待は今のところ，かなり満たされているように感じた今回の会議であった．

最後に今回の流星会議のマネージメントされて順調に会を運営された，信濃天文台の永井績氏に心から感謝を申し上げると共に，種々の便宜をはかっていただいた日本流星研究会の村上忠敬氏・藪保男氏，その他の方々に厚く御礼を申し上げて，いささかヤブニラミ的な筆者の流星会議の報告を終ることにしよう．

書　評

めたせこいや——池田徹郎随想集——

池田徹郎著

（池田徹郎随想集刊行会．246 頁．2,000 円）

著者は昭和 38 年5月に退職された緯度観測所長で，今年の5月に満 82 才を越えられ，緯度観測所に近い自宅で自適の毎日をすごしておられる．随想集は第一部花・鳥，第二部風・月，第三部炉辺雑想から成っている．随想の大部分は，岩手日報の「番茶煎茶」欄に発表されたもので，時期は昭和 23 年から最近の昭和 46 年にわたっており，第三部になると天文月報に掲載された山崎正光，橋元昌矣，山本一清，服部忠彦，平三郎諸氏の追悼文もすべて再録されている．表紙の裏側に著者による旧本館および創立当初の建物のスケッチが展開されて，読者に懐旧の情をかきたてる．第一部に「メタセコイヤ」という随想があり，この珍らしい遺存木の長命とたくましさにあやかって，書名がきめられた．著者はこの樹を観測所の構内の一隅に植え，将来遠方からも見えるようにと願われた．昭和31年に正門から入ってすぐ図書館のわきに植えられたメタセコイヤは現在 10 米あまりの高さに達している．「観測所を訪れる訪問者」という項目では，四季を通じて訪れてくる可愛らしい野鳥の動作が実に楽しく描かれている．著者は，「私にとって印象深い鳥はクヒナである．外套なしで観測の出来る頃が天文学者にとっては一年中で最良の季節だが，その頃になるとクヒナが決って訪れてくるのである．天頂儀室を取巻く堀に来て，終夜静にカー，カーとゆっくり鳴く」と観測者とクヒナの深い隣組の間柄をさりげなく述べている．私も観測中に聞えてくるクヒナの鳴声をしばしば俳句に織り込んだことがある．

第二部のなかに，「ハレー彗星」，「水星観望の好機」，「水晶時計」などの天文に関する項目が含まれている．子供さん向の「月のふしぎ」，「続月のふしぎ」も楽しい天文物語である．

第三部では，最初木村栄初代所長に関する3項目が，直接教えを受けた残り少ないお弟子さんとしての著者ならではの珠玉の随筆となっている．殊に川崎俊一技師（後に二代目所長）が長男愛作さんをもうけた時の記念に木村先生から頂いた書が「愛作乳呑」とアイザック・ニュートンをかけたウイットはほほえましい．次に観測所の生みの親ともいうべき田中館愛橘先生を想う3項目も貴重な随筆である．「緯度観測六十年の苦楽」には厳冬と真夏の時の観測中の苦労が実感をもってえがかれている．第二次大戦中も緯度観測を1日も休まず継続した最高責任者としての著者の体験が，「緯度観測に四十年」のなかに短く述べられている．

緯度観測所に 41 年間の長期にわたって勤続された著者が，観測と研究の合間に，花鳥風月を愛し，人と人との交流を大切に保ち，おのずから風格を形成されたことは，後輩である私達の学ぶべきことである．著者の愛弟子である岩手大学名誉教授石川栄助氏が随想刊行の音頭をとり，固辞された著者に叱られながらも遂に刊行にこぎつけたことを特に記し，緯度観測所にゆかりをもつ方々にぜひ一読をおすすめしたい．最後に，刊行後著者が指摘された正誤表にまつわるエピソードを紹介する．「観測所の動物」の初めの一節，「当所創立の当時はここへよくキツネが出たそうだ．北方1キロの日高神社のキツネとが，互に訪問し合う途中観測所に立寄ったものだという」という文中で，「日高神社のキツネと南方2キロの須江稲荷のキツネとが」と補筆された．これには私も笑をこらえるのに一苦労した．まことにほほ笑ましい北と南のキツネのランデブーである．

（須川　力）